

社説

県内有数の豪雪地帯である西川町大井沢で地域医療に尽くした女性医師志田周子(ちかこ)の生涯を映画化する事業が本格的に始動した。同町で先月16日、「志田周子の生涯を銀幕に甦(よみがえ)らせる会」の設立総会が開かれ、2013年度から映画制作の募金活動に入ることを確認。周子の生き方そのものを資源としてとらえた地域おこし型の映画作りとして注目していきたい。

志田周子は1910(明治43)年、左沢町(現大江町)で生まれた。志田家は大井沢村の名家で、父が大井沢小学校長となった14(大正3)年に帰郷。周子は現東京女子医科大学を卒業後、35(昭和10)年に24歳の若さで無医村だった大井沢に戻り、診療所医に着任。地域医療を担いながら村議や婦人会長も務めたが、62年に食道がんのため引歳で死去した。

大井沢に生涯ささげた女性医師

豪雪地での苦勞は、周子が晩年に女性誌に寄稿した文章からうかがい知ることができる。開業当初は村人の信頼を得られず、ぐったりしたネコを治してあげたことがきっかけで患者が来るようになったこと、急性消化不良を起こした少女を治療するため、それに乗せて半日がかりで26キロも離れた町立病院まで運んだこ

が組織され、11年から脚本家阿部美佳さん(尾花沢市出身)らと交えて映画化の可能性を探ってきた。銀幕に甦らせる会は映画化に向けた新たな推進母体として民間主体で組織し、役員体制は官民協働の厚い布陣となった。会長に阿部幸一月山朝日観光協会会長、副会長に黒坂久一西川町商工会会長らが就

志田周子の映画化期待

と、9人目の子どもをみこもった母を救えなかったことなどがつづられている。周子の生涯を映像化する取り組みは、県村山総合支庁が2008年、地域に貢献した人々の調査で志田周子に着目し、その映像化戦略を探ったことがきっかけとなった。10年には西川町で「やまがたの宝」志田周子資源活用化実行委員会

き、理事に松田徹庄内保健所長、池田こすえ山形女性医師ネットワーク会長らが就任。顧問には小川一博西川町長、渡辺兵吾大江町長らを迎えた。今後の課題はひとえに制作費1億円の確保だ。1口5千円の募金を町内外に広く呼び掛け、企業や団体の出資も募っていく。13年度までに5千万円を集めて脚

本を制作。14年度は3千万円の募金・出資金を上積みし、国と県の補助(各1千万円)も得て撮影に入る構想だ。設立総会では、脚本を執筆する阿部美佳さんが「弟の悌二郎さんの視点から周子の生きざまを追う、村人のために頑張った姿を描いていく。無医村で悩む世界中の人たちにこの映画を届けたい」と意欲を語った。周子の生涯を描いた作品には鈴木久夫さん(元宮宿小学校)のノンフィクション「周子の生涯」(1975年)、直木賞作家高橋義夫さんの小説「風吹峠」(91年)などがあるが、阿部さんは同じ雪国育ちの女性作家として新たな周子像を紡いでくれることだろう。地方の医師不足は今も全国共通の課題である。周子の生涯を描く映画が全国各地で地域医療を担っている関係者の励みとなり、月山の懐に抱かれた自然豊かな大井沢での暮らしが温かく伝わるような作品となることを期待したい。